

僕は

芥川龍之介



誰でもわたしのやうだらうか？——ジュウル・ルナ
アル

僕は屈辱を受けた時、なぜか急には不快にはならぬ。が、
彼かれは一時間ほどすると、だんだん不快になるのを常としてゐ
る。

×
僕はロダンのウゴリノ伯を見た時、——或はウゴリノ伯の
写真を見た時、忽ち男色だんしよくを思ひ出した。

×
僕は樹木じゆせきを眺める時、何か我々人間のやうに前後まへうしろのある
やうに思はれてならぬ。

僕は

×

僕は時々暴君になつて大勢おほぜいの男女なんによを獅子や虎に食はせて見たいと思ふことがある。が、膿盆のうぼんの中に落ちた血だらけのガアゼを見ただけでも、肉体的に忽ち不快になつてしまふ。

×

僕は度たび他人のことを死ねば善よいと思つたことがある。その又死ねば善いと思つた中には僕の肉親さへるないことはない。

×

僕はどう云ふ良心も、——芸術的良心さへ持つてゐない。が、神経は持ち合せてゐる。

×

僕は滅多めったに憎んだことはない。その代りには時々輕蔑してゐる。

×

僕自身の経験によれば、最も甚しい自己嫌悪けんをの特色はあらゆるものに謙うそを見つけることである。しかもその又発見に少しも満足を感じないことである。

×

僕はいろいろの人の言葉にいつか耳を傾けてゐる。たとへば肴屋さかなやの小僧などの「こんちはア」と云ふ言葉に。あの言葉は母音ほいんに終つてゐない、ちよつと羅馬字ロオマジに書いて見れば、Konchiwas と云ふのである。なぜ又あの言葉は必要もないSを最後に伴ともなふのかしら。

×

僕はいつも僕一人ではない。息子むすこ、亭主、牡をす、人生観上の現実主義者、氣質上のロマン主義者、哲学上の懷疑主義者等どう、

等、等、——それは格別差支さしつかへない。しかしその何人かの僕自身がいっつも喧嘩するのに苦しんでゐる。

×

僕は未知みちの女から手紙か何か貰つた時、まづ考へずにゐられぬことはその女の美人かどうかである。

×

あらゆる言葉は銭のやうに必ず両面を具へてゐる。僕は彼を「見えばう」と呼んだ。しかし彼はこの点では僕と大差のある訣わけではない。が、僕自身に従へば、僕は唯「自尊心の強い」だけである。

×

僕は医者いしやに容態を聞かれた時、まだ一度も正確に僕自身の容態を話せたことはない。従つて謙うそをついたやうな氣ばかり

してゐる。

×

僕は僕の住居すまひを離れるのに従ひ、何か僕の人格も曖昧あいまいになるのを感じてゐる。この現象が現れるのは僕の住居を離れること、三十哩マイル前後に始まるらしい。

×

僕の精神的な生活は滅多めったにちやんと歩いたことはない。いつも蚤のやうに跳ねるだけである。

×

僕は見知越しの人に会ふと、必ずこちらからお時宜じぎをしてしまふ。従つて向うの氣づかずにある時には「損をした」と思ふこともないではない。

僕は

僕は

底本：「芥川龍之介作品集第四巻」昭和出版社

1965（昭和 40）年 12 月 20 日発行

※底本の「羅馬字《ロオてじ》」は、「羅馬字《ロオマじ》」にあらためました。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999 年 1 月 27 日公開

2003 年 10 月 20 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。